

ガラスの仮面 ショコラ対決

主人公2人「愛を表現」

少女漫画「ガラスの仮面」IIの作家、美内すずえさん(64)が主人公2人をイメージして作ったショコラが、新宿高島屋で28日から販売される。「ガラスの仮面」はいまも連載が続き、今年で40周年。特別番外編として、2人がチョコレート作りで対決する「愛のメソッド」を書き下ろした。

新宿高島屋 あすから販売

「さあ、ショコラで愛を表現なさい！」

特別番外編は、主人公の北島マヤとライバルの姫川亜弓に、演技の師匠・月影千草がパレンタインのチョコレート作り対決を迫る話だ。演劇界の名作「紅天女」の最後の課題という設定だ。

新宿高島屋からパレンタイン用を依頼された美内さんは「面白そう。私、食い

しん坊だから」と快諾。美内さんのアイデアを夫でフランス料理店経営の猿舘英明シェフ(41)が形にした。「マヤ・ショコラ」は憧れの「紫のバラの人」との

思い出を詰めて紫の花びらをのせたトリュフ。「アユミ・ショコラ」はせいたくな素材を使い、金箔がのった華やかなガナッシュを作った。カフェも併設され、2人をイメージしたケーキが食べられる。夫婦のショボ作品だ。

ガラスの仮面
1976年に「花とゆめ」(白泉社)で連載が始まった。天才的な演技力を持つ北島マヤと、有名監督と大女優の娘・姫川亜弓のライバルが、幻の名作「紅天女」の主役の座をめぐり、競い合って成長する。単行本は49巻まで発行。累計発行部数は5千万部を超える。何度もアニメやドラマ、舞台化されている。



ことはない。ただ、「紅天女」を試演する話に入ってからはずいぶんいいの。日本舞踊や能、歌舞伎など様々な人から演技について聞き、模索している。

10年前からラストの映像は決まっている。でもあと何年とは、うかつに答えない。どんどん延びているから。未完に終わる不安は全くない。必ず描ききる。登場人物は私の中でずっと一緒に生きている。描き終わっちゃったら、すごいさみしいだろうな。

紫の花びらがのった「マヤ・ショコラ」(左)と、金箔がのった「アユミ・ショコラ」



「ガラスの仮面」の特別番外編「愛のメソッド」から

亜弓は高級 マヤは星を

作者・美内さんに聞く

40年間連載を続けている美内さんに初のショコラ作りと、「ガラスの仮面」への思いを聞いた。

◇
ショコラ作りを依頼されたとき、亜弓は一流好みなので高級なチョコ、マヤは好きな人に送るから星や銀河を入れたい、とすぐにイメージが膨らんだ。

連載は40年も続くとは思わなかった。13歳だったマヤはいま20歳。主人公たちが演じる劇中劇も台本をきちんと作り、せりふを抜き出して演じさせている。2人に合う劇中劇まで作ると、時間がかかる。

連載を始めて10年ぐらいで、流行はあえて採り入れず、定番を描こうと決めた。

流行のファッションや言葉はすぐに古くさくなるから。最初は黒電話だったが、さすがに携帯電話だけは登場させた。時代設定が矛盾することもあるけれど、大事なものは物語の骨格。どんな時代でも人間の心は普遍的だ。ときめく気持ちや嫉妬心は誰の心にもある。いつの時代でも変わらないものを描きたい。

マヤは「ダメでもともと」という言葉を何回も言う。いろんな障害や壁をどうやって突破するのか。前向きに乗り越えて挑戦する姿を描いてきた。万に一つでも成功する可能性があるなら、やってみようという生き方を伝えたかった。

連載が中断したことは何度もあるが、やめようと思った